# 踏　み　跡　＜My　Mountains＞

| 八ヶ岳 | 行者小屋から真教寺尾根 | No.145 |
|---|---|---|

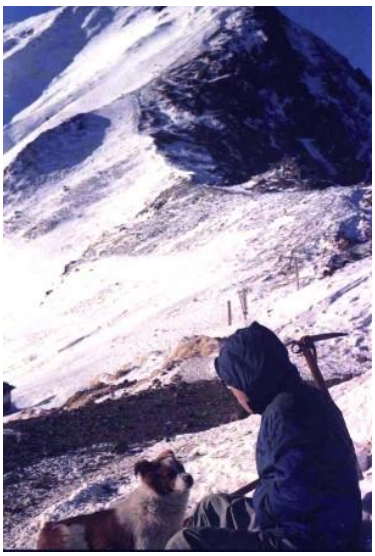
昭和４５年１月２６日
久しぶりに一緒にまとまった休みがとれることになり、加藤が全装備を車に積んで国立の我が家まで来た。「くにたち山荘」と称するわが部屋で半日だべりながら真教寺尾根へのプランを煮詰めた。
くにたち山荘の前へ車を置いて、この日の夜行列車で出発。

昭和４５年１月２７日
例によって脊髄まで沁みとおるような寒さの中、茅野駅からバスで美濃戸口へ。美濃戸山荘、快い雪のきしみ音の上で朝食。コッヘルから立ち上がる湯気の濃さがひときわ寒さを物語ってくれる。
歩きなれた赤岳鉱泉への道は沢に入って行くにつれて雪の量を増して、アイゼンの音とオーバーシューズの色と雪の白さ、空の青さ、すべてが調和して無限大のキャンバスを感じさせる。これは夢ではないかと思うような空の紺色の深まり、大同心の岩場から流れ出るように尾を引く一条の雲の白さ。これらは皆冬の山に入った者にしか得られない喜悦だとしか言いようがない。
赤岳鉱泉、空のきれいな午前の太陽をさんさんと受けて光り輝きながら融ける雪。ここでかなり長めの休憩。明日山越えをして真教寺尾根を下る計画なので、今日は行者小屋まで歩を進めておけば良い。そんなスケジュールの余裕がのんびりした大休止を誘う。硫黄岳、横岳、赤岳と連なる屏風絵を前に白い雪の上に黄色いポンチョを敷いて腰を下ろす。美濃戸からついてきた犬が我々二人の周りを嬉しそうに駆け回っている。
中山峠への急な登りでひと汗かき、タンネの雪を肩に受けながら静かに下ったところが今日の宿泊地の行者小屋。まだ日も高いので小屋の脇にツエルトを張り、誰かが残して行ったガソリンと僅かな倒木とで焚き火を楽しみながら休憩。犬はまだ一緒におり、焚き火と太陽のぬくもりとで日向ぼっこを楽しんでいる。
黄色いツエルト、赤い帽子と黄色い帽子、空色のヤッケと朱色のヤッケ、行者小屋の橙色の屋根、黒みがかった深緑色のタンネ、鉄色の大同心と小同心を中心とした横岳西壁、真綿の薄い切片が一枚流れる紺色の空、白く飽くまでも白い雪、これらすべての色彩を何度もファインダーに入れてシャッターを切った。（右：行者小屋前にツエルトを張る）
さんざん太陽の光を浴びて体は温まったが、日が暮れるとやはり寒い。美濃戸から来た犬もさぞ寒かろうと追い返そうとしたが帰らない。知らぬ振りをしていればいずれ帰ってしまうだろうと思っているうちに夜になってしまった。星空の下のツエルトはやはり寒かった。

昭和４５年１月２８日
朝起きてツエルトの小さなベンチレーターから眺めた空が見事な快晴だったら・・・・・。
山の生活でこれほどうれしいことはない。
露岩が多くアイゼンがいやらしい音を立てる石室への直登ルートをとることにした。高度を上げるにつれて北アルプスの主な峰々が背中を襲うように現われてくる。犬は相変わらず我々と行動を共にしている。アイゼンを付けていない犬は時々スリップしそうな音をたてながら、爪をつきたてて歩いて付いてくる。
石室での小休止はいつも富士山を眺めながらだ。北西からの風がヤッケの袖をはためかせると、いかにも冬山らしさが盛り上がってくる。（右：中岳・阿弥陀岳と北アルプス方面）
2899mの赤岳は常と変らぬ眺望で、およそ関八州の山々は手中にすることができる。
距離が近いせいか仙丈のカールの輝きがひときわ目をひく。
キレットに向かって少々下り、龍頭峰で東に折れて真教寺尾根に入る。しばらくは吹き溜まりの雪の中を下り、やがて大きな露岩のある急斜面で俄かに急降下する。

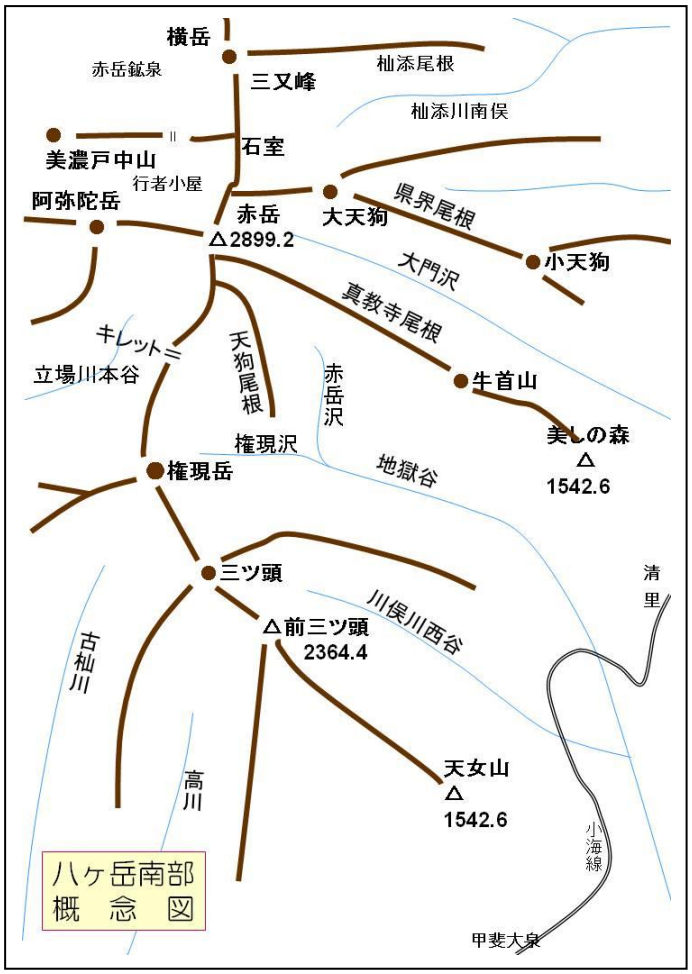
# 踏　み　跡　＜My　Mountains＞

美濃戸からついてきた犬は、露岩とアイスバーンの 1.5m ほどの段差が越えられず鼻を鳴らして我々に助けを求めて来た。よほど助けてやろうかとも思ったが、ここを下ってしまうともう二度と美濃戸へは戻れなくなってしまうので、心を鬼にしてここでの別れを決意した。最後に加藤の膝の上で記念撮影をし、別れのプレゼントに一篇の詩を頭の中に描いた。



みのとからついてきた　変な犬
おまえは　タフだ
かわいいつめで　むきになって
アイスバーンを登る
さむくないのかね？
ゆきのはらの　どこかで夜をすごして
足の裏が　まっかじゃないか
はらがへらないの？
雪ばかり食べて
ほら！　ビスケットでもくいな
きみは　道をよく知っているねえ
石室まで　雪の中に
小さなふみあと

美濃戸からついてきた　変な犬
君には　真教寺尾根はむりだよ
ゆるしておくれ
サヨウナラ

足の裏の犬特有の膨らみが赤くはれ上がって、うっすらと血がにじんでいた。
急な斜面を 5 分ほど下り、振り返ってみると犬はまだ岩の上に立っていた。
ふと我にかえると、右手に大きな襞を胸に描いた権現岳がこのあたりを制するかのような迫力で立っているのが印象的だった。
牛首山、天女山などを眼下に見下ろし、アイゼンを利かせてどんどん下って行く。富士が見上げる高さになる頃には雪は柔らかくなり、小さな雪崩が何度も我々を脅かす。
樹林に入ると、今度は深い積雪が我々を悩ませたが、足取りは順調。
美しの森まで来ると、赤岳は「えっ、あそこから下って来たの？」と言いたくなるぐらいに、信じがたい高さで背後に退いていた。
清里から小渕沢に向かう小海線の車窓から見る山なみは、今日も素晴らしい「山旅のフィナーレ」だった。

以上